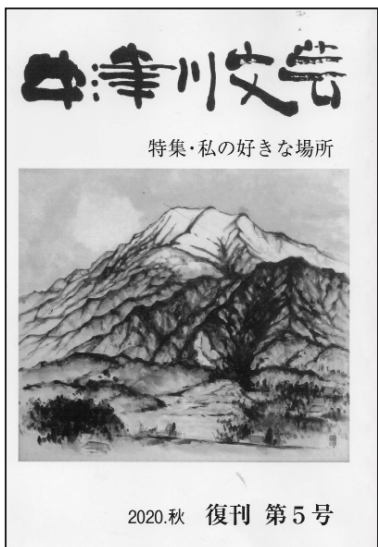


●「中津川文芸」(岐阜県) 復刊5号

「中津川文芸」は四〇年ぶりに復刊したと言う。編集後記にあるように、「まだ消えずに残っている楷火ほたびのような文学に対する熱情」が流れている。短歌や詩、小説、戯曲だけでなく、訳詩や映画、音楽に触れる文章もあり、ふくやかな奥行きを持った誌になっている。長野県に隣接する中山道旧街道の宿場町の歴史を反映して、それらを文章に表す「私の好きな場所」の特集を組んでいるのも趣きを添えているし、人口八万の中津川市における「中津川の俳句の変遷について」(太田光子)など歴史を辿り、過去を大事にする姿勢も情緒を深めている。これらを支える主宰の(仕掛人とあるが)田中伸治の情熱と包摂力に高いものを感じる。

これらを反映して、「夢の岸」(鴨居諒)も、味のある短編としてこの世のはかないおぼろさを映出している。夢の池に浮かぶオールのないボートの像から始まって、いつの間にかどこかへ行ってしまう娘の人形、台風に吹き荒れる竹藪の、招くような誘い、成長しない芍薬、人の声を聞いてその言葉に危機を感じたように咲き始める椿など、

の防空壕の記憶やドライアイスを通して、繊細かく描いて胸に残る。佳品としての好短編である。ドライアイスが最後まで生きている。準優秀作。またエッセイの「角島へ」(三原后代)も傘寿の仲間旅行を、よく人生を振り返りながらその深い味を散りばめつつ、滋味を匂わせている。「ハーンの横顔」(佐藤弘二郎)も、来日したものの、異国の風土や社会に生活が追いつめられていたラフカディオ・ハーンの状態をよく汲み取り、おノブという伴侶を得て、日本の心の中に沈潜して、名作を生み、文学を残していく過程をよく刻印している。巻頭の「わけあって飼うこととにことになりました」(耽羅沢楯)は九〇枚ほどの力作で、アパレル商品の販売に従事する現場の格闘はよく書かれていて、その忙しい競争の生活の中で犬を飼い始めると、



自然の不思議な様相が夢と繋がり、またボートに還ってくる。確かにこの世には、夢に繋がる現実があり、夢と現実が溶け合っている不思議な生命のあわいがある。夢からの転位と夢への転位が自然に行き来している場があり、それがこの世の奥には滔々と流れている。神秘でもあり、それが生命の裏の相をも映しているのかもしれない。こういう世界を描き切るには、文章に対する繊細な技量が必要で、磨かれた表現力がないと実現しない世界だろう。この技量と感性に対して、優秀作に推挙したい。

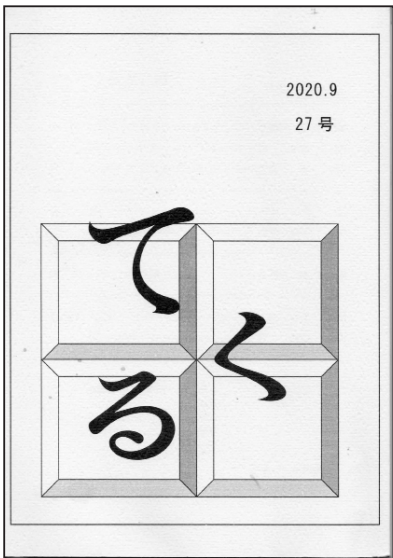
●「てくる」(滋賀県) 27号

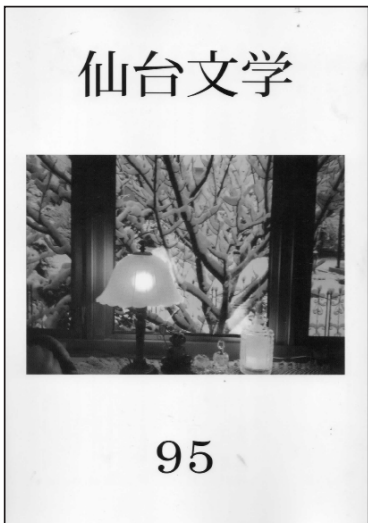
単色のあっさりした表紙だが、現代的な日常の中にそれを生かしながら投げ所を見つけていくスタンスはしつかりしている。文章を書くと言うことの意義の確かさが感じられる。「ドライアイス」(安海泰)は、父親の死の別離を、戦争

意外に物事が好転していく不思議な世界を描いている。犬との散歩の世界によって、ゆとりが生まれ、発想が豊かになって、会社の競争世界を切り抜けていく過程はおもしろく流れていくが、肝心の犬の姿がほとんど出てこない。犬のかわいらしさや姿が描かれていないところに大きな欠落が感じられる。しかしその犬が晴天を呼ぶという明るい発想は爽やかでいい。時間が飛びすぎて、その犬の成長していく姿や老いていく姿が何もないのも寂しく、その犬が死んでからの後半のハクという別な犬の話も、あえて繋げる必要はなく、別の物語として独立させるべきだが、動物が激しい競争社会の中で癒しになり、人を和合させる力がある着眼は、すがしいものがあった。主人公の名前が凝りすぎ。

●「仙台文学」(宮城県) 95号・96号

「仙台文学」はいよいよ一〇〇号に近づいてきて、顕彰すべき時機にあるが、95号・96号に分載された「キツネピ」(渡辺光昭)は、重い陰影を曳いていて、引き込まれた。いつもバス停で人に順番を譲って見送る奇態な行動を取る人物に引かれて、家まで後を付けていき、世から捨てられた佇まいの家と生活を目にするが、それが一方で、精神を病んで死んでいく伯母と重なる。伯母は勤め先で心を壊して放火癖を持つようになる。その放火の残像がキツネピ(狐火)となつて、主人公の周囲を揺れ動くようにな



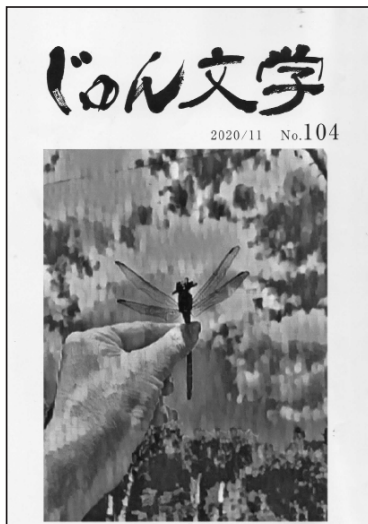


る。病院で孤独死した伯母の密葬を終えて日常に戻った主人公は、バス停の「譲り男」の存在がないことを知る。そして以前行った男の家を訪ねると、それは数年前の廃墟としてそこにあり、崩壊感に襲われる。そこにキツネビが揺れ、自分が誰かから後を付けられる立場になって、そばに動物のにおいを感じるところで終わる。よく練られていて、ある深さに到達しているが、バス停の「譲り男」がリアルに描かれて存在感を持っているので、結末でそれが過去の残影の中に一気に押しやられてしまうのは、残念な気がする。読者の胸の底には伯母の放火癖が深く残る。それゆえその家と「譲り男」を過去の幻にするよりは、伯母の死の前後に、その家が火事で焼失してしまうとした方が、ストーリーとして盛り上がっただろう。その方が伯母の怨念が生きたのではないか。優秀作には違いない。直した上で評

価をさらに求めてもいい。

●「じゅん文学」(愛知県) 104号

「破れ蓮」(飯田芳)は衝撃的な作品である。文章はやや粗いが、母殺しのテーマは重い。農業が嫌いな「私」は、父親の戦後の遺族年金を受け継いだ母親の年金に頼ってパチンコに明け暮れる生活を送っている。かろうじて結婚して子供もいるが、母親の認知症が進むにつれて、妻の負担が大きくなり、結局堪えきれずに、子供を連れて家を出ていく。一人で介護し切れない過重から、生活はいっそう破綻していく。結局田圃を這いずり回って泥だらけになった母の体を洗いながら、憎しみに殺意が重なって湯船に溺れ死にさせていく。その死体を蓮の池に埋める。そして結局母の死体を確かめに蓮池に入って自らも泥に沈んでいくと



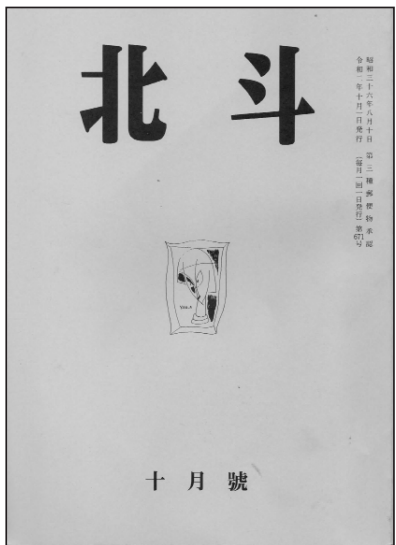
いうストーリーだが、浴室での殺しのシーンには迫真力がある。凄惨なストーリーに、何か身につまされるような恐怖感が伴う。これは、肉親の殺人は現実には起こりにくいという一面をわきまえながら、この衝動は現在の日本の至るところで渦巻いていて、意外に普遍的な心理なのではないかという危惧感が拭いきれないからである。老人大国の日本が抱える深刻な問題を、期せずして浮かび上がらせている。優秀作。

●「北斗」(愛知県) 671号
「文学街」が終刊となった現在、毎月発行されている同人誌はこの「北斗」と、熊本県の「詩と眞實」だけである。月刊の苦勞は、並大抵のものではないはず。大いに称揚されていいと思う。

この号は、エッセイや評論に鋭利なエスプリを感じた。「カナダ回想記(二)——日本への教訓——」(池田龍一)は、五十年前のカナダ滞在の記憶を元に、国や風土の違いを的確に捉えながら、日本への教訓として生かす筆を運んでいる。文化や慣習の違いに触れるだけでも、日本の当たり前と思っている日常が異なった光で照らし出され、新たなヒントになる外国滞在記にはおもしろく、有益なものがあるが、その違いを明確に照らし出して、それを咀嚼し吸収させて新たな知識の糧とするには、それを記す人の見識の高さや認識力の深さにかかっている。その意味で、領

かされることの多いカナダ回想記であり、有益な上に、発想転換のいいヒントに満ちている。

また「『時代』について(2) 姜尚中『朝鮮半島と日本の未来』を読みながら」(町井たかゆき)も、豊かな体験に基づいた鋭い批評を展開している。「元東大教授もこの程度のものかと少々気落ちした」「この本自体は物足りなかった」と率直に言うに留まらず、「姉の亭主が北朝鮮の元山の生まれ」という体験や仕事を通して日本と韓国の間にある軋轢を探り、アイルランドにまで話を飛ばして、近接国家の格差の存在にも原因を求めていく。豊かな経験を素地にした論究の翼はおもしろく「文明の格差」は説得力があり、その壮大な展開に魅力があるものの、現在の韓国



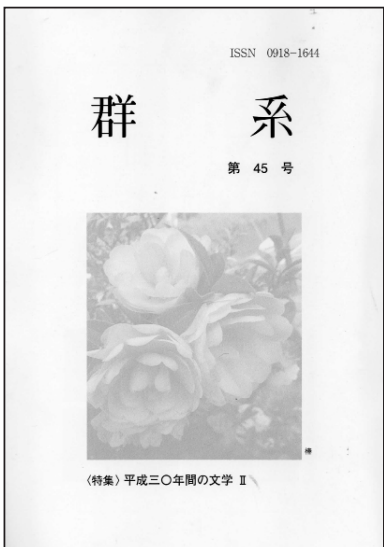
が次から次へと問題を出してくる原型が江戸時代の「朝鮮通信使」にあり、現在も「排日」に熱心なのは、日本の支配期に機械や制度などの文明を鮮やかに導入したことに嫉妬している姿なのかもしれないという結論部分は、違和感を覚える。秀吉の朝鮮出兵も抜けているし、国を併合された者の痛みも蓋をされている上で、韓国人が読んだら反駁されるだろう。もし日本の支配がなかったら、朝鮮戦争は起こらなかったというところまで想像を及ぼせる必要があると思う。

●「詩と眞實」(熊本県) 857号

「詩と眞實」も毎月発行しているのは、感嘆する。今号には力の入った小説が二篇あった。「M坑のハト」(まえだ



かずき)と「アムール」(今村有成)である。「M坑のハト」は廃坑を国史跡として管理する者を軸に展開していて、現在(おそらく三池炭坑跡と思われるが)廃坑はこのようなになっているのか、とあらためて興味をそえられる。ここにハトが巣食って糞害をもたらす。この処理に悪戦苦闘する話で、しっかり書かれている分おもしろく読めるが、現在の観光状況を主体に描いているので、もう一つ炭坑の歴史や当時の地下坑内の現場の凄さが伝わってこない。地下二六〇メートルまで降りて石炭を掘っていたという、地獄と隣り合わせの世界の片鱗は説明としては窺われるが、ここにしっかりと回想を施して実際の現場のシーンを蘇らせたなら、もっと重量感のある作品になっただろう。こうした過重な労働が戦前、戦後の日本の工業発展を支えていたはずで、筆がその現場の凄まじさにまで及べば、迫力あるものになっただろうと、惜しまれる。しかしそれを窺わせるだけでも、書いた価値はある。準優秀作。もう一篇の「アムール」は六〇年安保の時代で喫茶店「アムール」を舞台に展開される青春物語であるが、恋愛に労働運動や安保の政治状況も絡んで、当時の息吹がかなり伝わってくる点に、生きている脈動感が伝わってきた。小説として成立しているかは微妙なところではあるが、確かに昭和三十年代の世界は生きている。その息づきには共感を覚えた。



●「群系」(東京) 44・45号

いつもユニークな評論特集を組む「群系」は「平成三〇年間の文学」をⅠ・Ⅱにわたって特集していて、平成に活躍した作家をほぼ網羅して平成文学の輪郭を得ようと試みている。それぞれの作家の特徴は捉えているが、全体として平成の文学像が浮かび上がったかという点、模糊としてもう一つぼんやりしたままに留まっている。むしろその中にある「私説・平成の芥川賞」(星野光徳)の論評が、平成以降の文学の本質を突いていた。昭和の芥川賞作品の魅力をあげて、それらと対比しつつ平成の芥川賞作品の内質の衰えを指摘している評には説得力があり、現在の不毛な文壇状況とそれに繋がる文芸出版の本質を摘出している。推薦作。

今回の称揚作品をまとめたい。

優秀作

- 「夢の岸」 鴨居 諒「中津川文芸」復刊5号
- 「キツネビ」 渡辺光昭「仙台文学」95号・96号
- 「破れ蓮」 飯田 芳「じゅん文学」104号

推薦作

- 評論「私説・平成の芥川賞」(星野光徳)「群系」45号
- 準優秀作
- 「ドライアイス」 安海泰「てくる」27号
- 「M坑のハト」 まえだかずき「詩と眞實」857号
- (全国同人雑誌振興会)五十嵐勉

